

「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びに 読書行動が与える影響に関する一考察

A Study on Impacts of Childcare Students' Reading Behavior on Learning through Simulated Childcare of “Picture Book Reading”

中野 広 大^{*1}

Kodai NAKANO

Abstract

This study investigated the effects of differences in university students' reading behaviors on learning through their simulated childcare of “Picture book storytelling.” An online questionnaire survey was conducted to childcare students in my class “Methods of Teaching Childcare Content (Language),” and the results were statistically analyzed. As a result, regardless of differences in their reading behavior, students gained learning to the same degree in through their simulated childcare of “Picture book storytelling.” However, statistically significant differences were found in the item “4. Through my simulated childcare and reflection, I could learn perspectives to improve childcare.” This indicates that students with higher reading behavior are more likely to reflect on their simulated childcare and learn to the same degree about perspectives to improve childcare. It is necessary to consider initiatives to increase students' interests in reading that will support their learning childcare.

Keywords: Childcare content (Language), Picture book storytelling,
Simulated childcare, Reading behavior

1. はじめに

汐見・無藤（2021）はこれからの日本の保育所保育について「子どもが主体となって、遊びを中心とする自発的で発展的な活動に取り組むことを原理とするということであり、そのための条件づくり（環境づくり）が保育の基本原則」と述べている。平成27年3月に、『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』が改訂され、保育内容5つの領域に基づいた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。「言葉による伝え合い」では、「保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」とある。

上記のような保育を実現していくにあたって、まずは、保育者を志す大学生が、絵本や物語へ親しんだり、言葉による伝え合いを楽しんだりする経験が必要であることは言うまでもないだろう。また、保育における領域「言葉」の位置づけや保育内容としての構想の仕方や展開の方法、実践のための知識と技術を学ぶことも必要不可欠である。それらを実現していくためには、他科目と連携して学生の学びを系統的・横断的に設計していく必要がある。さらには、読書や体験活動等の学生の学びを下支えすると考えられる事物への意識や経験が学修にどのように影響しているか明らかにし、授業における教授方法や学習方法、課題学習の内容等について検討していく必要もある。

^{*1}くらしき作陽大学 子ども教育学部 Kurashiki Sakuyo University, Faculty of Childhood Education

2. 目的と研究の問い

大学という高等教育機関における読書について、佐藤ら（2007）は、「『読書』は学びの基礎」（p.61）であり、「読書を通じ、①広い視野や社会への問題意識を持つ、②思索の力や想像力を養い、人間性を磨く、③教養を培う（生涯学習や楽しみとしての意義も含む）」という点も期待できる」（p.61）としている。読書の有用性について、村田（2010）は「読書し、思考する。思考し、読書する行為のくり返し、学びの機能を深め、高めることに帰着する。つまり、読書は、学習行為そのものといえる」（p.72）と指摘している。

読書について、その機能や有用性は多岐に渡っており、学生においても読書行動の違いによって学習に影響があると考えられるため、「読書行動の高い学生は、読書行動の低い学生に比べて、『絵本の読み聞かせ』の模擬保育から得た学びも多いのではないか」という問いを立てた。

したがって、本研究の目的は、保育を志望する大学生を対象としたアンケート調査の結果を分析し、読書行動の違いによる「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びの差があるか明らかにし、学習効果を高めていくために必要な指導の手立てについて示唆を得ることとする。

3. 方法

（1）調査・研究方法

中国地方にある保育者養成を行う4年制大学において、筆者が担当している授業科目「保育内容（言葉）の指導法」を履修する大学2年生72名を対象に、Googleフォームを活用したオンライン質問紙調査を実施した。対象となった学生は、全員1年次に授業科目「保育内容（言葉）」を履修している。2022年7月21日・25日、72名すべての学生に対して「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びについてのアンケート回答を求めた。

質問項目については表1のとおり独自に作成した。まず、質問項目1～6については、「教職課程コアカリキュラム」（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会，2017）で示されている「保育内容『言葉』の指導法」「（2）領域『言葉』の指導方法及び保育の構想」及び「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」（保育教諭養成課程研究会，2017）で示されている「保育内容『言葉』の指導法」のモデルカリキュラムを参考に作成した。また、質問項目7～9については、筆者が授業内容を鑑みて学生の学習成果を確認するために作成した項目である。表1に示した質問項目以外にも読書行動の指針として「読書は好きですか」という質問項目を設定した。すべての質問項目に対して、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で回答してもらった。

（2）「保育内容（言葉）の指導法」における模擬保育の取り組み

筆者が担当した「保育内容（言葉）の指導法」の中で、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育は次の手順で行った。

①状況（対象年齢や保育場面）等の設定をして選書、練習をさせる。

午睡前や給食前、お迎えを待つ時間や制作活動の前など、学生自身に保育場面や対象年齢を考えさせる。また、各自設定した状況に合った導入や読み方、子どもへの語りかけなどについても考えさせる。

②模擬保育前に、読み手に設定（対象年齢や保育場面）等を観察学生に伝えさせてから模擬保育を行う。

事前に黒板に設定を板書させることで観察学生に設定を知らせる。また、観察学生にはその設定に合う子ども役になってもらい模擬保育を行う。

③模擬保育後、観察学生に気付きやアドバイス等を記録シートに記入させる。

観察学生には、読み手が行った模擬保育の良かった点や改善点について設定等をもとに記録シートに記入させる。記録シートには、読み手が設定した保育場面や対象年齢、絵本の題名等も記入

させる。

- ④記録シートに記入した内容を数名の観察学生に発表させ、教員は口頭によるコメントをする。
教員が指定した列の座席の観察学生に、記録シートの内容を発表させる。また、教員も読み手が行った模擬保育に対してその場で口頭によるコメントをする。
- ⑤記録シート全員分の記述を集約して学生個別のフィードバックシートを作成し、後日読み手に渡す。
記録シートを毎回回収し、教員がフィードバックシートとしてまとめる。次回の授業で読み手に渡す。
- ⑥授業の後半回で、各自の模擬保育について、「絵本の読み聞かせ」の部分指導案を作成させる。
各自が設定した保育場面や対象年齢で部分指導案を作成させる。作成時には、他学生の模擬保育観察を通して参考になった点や反省点等も踏まえて書くように、指導・助言を行う。

4. 結果

アンケート調査の結果、「読書は好きですか」という質問に対して、「あてはまる」と回答した学生は20名(27.8%)、「どちらかといえばあてはまる」と回答した学生は29名(40.3%)、「どちらかといえばあてはまらない」と回答した学生は19名(26.4%)、「あてはまらない」と回答した学生は4名(5.6%)であった。「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」に回答した学生を、「読書行動『高群』」とし、「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」と回答した学生を、「読書行動『低群』」として各質問項目における差を検討した。

「保育内容(言葉)の指導法」で行った「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びを問う質問項目に対する「読書行動『高群』」と「読書行動『低群』」の各質問項目の平均値・標準偏差・両群間の t 検定の結果について、表1に示す。

全9項目中8項目で統計的に有意な差が認められなかった。このことから、読書行動の違いに関わらず、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びを同等程度得ていることが示唆されるが、もう少し詳しく結果を分析していきたいと思う。

全9項目中7項目の平均値が、読書行動「高群」の方が読書行動「低群」より高いという結果となった。その項目の中でも「3 具体的な保育を想定した指導案を作成することができた」の読書行動「高群」の平均値は3.29となっており、他の質問項目の読書行動「高群」の平均値より数値は低くなっている。また、「4 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けることができた」の読書行動「低群」の平均値は3.17となっており、他の質問項目の読書行動「低群」における平均値より数値は低くなっており、この項目においては、統計的に有意な差も認められた。

また、「6 子どもの発達段階や興味・関心、保育活動の流れやねらいに合わせた読み方の重要性を理解することができた」と、「8 保育実習等の現場で実践したい「絵本の読み聞かせ」のイメージを持つことができた」の平均値は、読書行動「高群」より読書行動「低群」の方が高いという結果になっている。「8 保育実習等の現場で実践したい「絵本の読み聞かせ」のイメージを持つことができた」の読書行動「高群」の平均値は3.73、読書行動「低群」の平均値は3.74となっており、その差が0.01であるため、この項目については誤差と考えられる。

5. 考察

全9項目中8項目において、統計的に有意な差が認められなかった。また全9項目中7項目の平均値が、読書行動「高群」の方が読書行動「低群」より高いという結果となった。その項目の中でも「3 具体的な保育を想定した指導案を作成することができた」の読書行動「高群」の平均値は3.29となっており、他の質問項目の読書行動「高群」の平均値より数値は低くなっている。これは、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育を実施するにあたり、模擬保育の場面設定が指導案作成にそぐわないものが多かった可能性がある。学生が実際に想定した場面は、午睡前や保護者のお迎えを待つ時間が多かった。「絵本の読み聞かせ」がよく行われる保育場面ではあるが、前後の保育活動との繋がりを持たせて指導案作成していくことは、学生にとって難易度が高かった可能性が考えられる。

表 1 「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びを問う各質問項目の結果

質問項目	全体 <i>n</i> =72		読書行動「高群」 <i>n</i> =49		読書行動「低群」 <i>n</i> =23		<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>
	M	SD	M	SD	M	SD			
1 幼児の心情、認識、思考及び動き等を視野に入れた保育構想の重要性を理解することができた。	3.50	0.50	3.53	0.50	3.43	0.50	0.75	70	0.46
2 指導案の構成を理解することができた。	3.51	0.58	3.55	0.58	3.43	0.59	0.79	70	0.43
3 具体的な保育を想定した指導案を作成することができた。	3.28	0.61	3.29	0.67	3.26	0.44	0.16	70	0.87
4 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けることができた。	3.42	0.57	3.53	0.58	3.17	0.49	2.55	70	0.01*
5 子どもの発達段階や興味・関心、保育活動の流れやねらいに合わせた選書の重要性を理解することができた。	3.61	0.49	3.67	0.47	3.48	0.51	1.59	70	0.12
6 子どもの発達段階や興味・関心、保育活動の流れやねらいに合わせた読み方の重要性を理解することができた。	3.67	0.47	3.65	0.48	3.70	0.47	-0.35	70	0.73
7 「絵本の読み聞かせ」の表現技術を習得することの重要性を理解することができた。	3.82	0.38	3.88	0.33	3.70	0.40	1.89	70	0.06
8 保育実習等の現場で実践したい「絵本の読み聞かせ」のイメージを持つことができた。	3.74	0.44	3.73	0.44	3.74	0.44	-0.04	70	0.97
9 様々な視点をもって、他者の模擬保育を観察することができるようになった。	3.56	0.55	3.63	0.52	3.39	0.58	1.75	70	0.08

**p* < .05

次に、統計的に有意な差が認められた「4 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けることができた」の項目について検討する。読書行動「低群」の平均値は3.17となっており、他の質問項目の読書行動「低群」における平均値より数値は低くなっている。これは、先に挙げた村田（2010）の読書の有用性についての指摘と関わっていると考えられる。読書を通して思考することを繰り返し、学習機能を高めていることから、読書行動が高い学生ほど思考することに慣れていると捉えることもできる。「絵本の読み聞かせ」の模擬保育では、学生は読み手となって模擬保育を行うだけでなく、観察役としてすべての学生の模擬保育を観察した。また、観察した模擬保育についての気づきやアドバイスを毎回記入した。教員からの口頭でのコメントも一人一人に対して行っている。他学生や教員の意見を聞く機会が毎回用意されていることによって、自身の気づきやアドバイ

スとの比較、検討をする機会が多くある。そのため、読書行動が高く、思考することに慣れている学生ほど、模擬保育を振り返り、保育を改善する視点についての学びが多くなっていると考えられる。さらに、「絵本の読み聞かせ」の部分指導案を作成したことによって、模擬保育の実践と観察で得た気づきや学びを言語化してまとめる機会となり、模擬保育の振り返りや保育を改善する視点の学びが深まったと考えられる。一方で、他の質問項目の読書行動「低群」の平均値と比較して数値が低くなっているのは、模擬保育後の他学生や教員からのフィードバックシートやコメントが、模擬保育の良かったところを中心に述べられたものが多かったことや、模擬保育の反省を踏まえて再度実践する機会がなかったことが関係していると考えられる。

最後に、平均値が読書行動「高群」の方が読書行動「低群」より低い結果になった「6 子どもの発達段階や興味・関心、保育活動の流れやねらいに合わせた読み方の重要性を理解することができた」の項目を検討する。これは、読書行動の違いによって、絵本の多様な読み方についての視野の広さから差が生まれたものではないかと考えられる。「絵本の読み聞かせ」の模擬保育後、教員からは「絵本の読み聞かせ」の表現技術や、学生が設定した子どもの年齢・保育場面に合わせた読み方などについてコメントを行った。読書行動「低群」の学生は、教員からのコメントによって、絵本の読み方についての視野を広げていったのではないかと考えられる。読書行動「高群」の学生は、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育に対する教員からのコメントを受けて、自身の模擬保育を振り返り、改善の余地があることに気付くなどの省察をしていると考えられる。その結果、読書行動「低群」の学生に比べて、平均値が低くなったのではないかと考えられる。

6. おわりに

本研究では、保育士養成科目である「保育内容（言葉）の指導法」で実施している学生による「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びが学生の読書行動の違いによってどのような差が生まれるのかをアンケート調査の回答の統計処理に基づき、考察を行ってきた。

その結果、読書行動の違いに関わらず、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における学びを同等程度得ていることが示唆された。しかし、「4 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けることができた」の項目においてのみ有意差が認められ、読書行動「高群」の学生は、読書行動「低群」の学生に比べて、模擬保育の振り返りや保育を改善する視点の学びが高まることが分かった。保育を改善する視点は大変重要である。そのため、学生の学びを下支えする読書に興味を持てる取り組みを考えていく必要があり、この点を今後の課題としたい。また、統計的に有意な差は認められなかったが、各質問項目の平均値を分析していくことで、学生が「絵本の読み聞かせ」の模擬保育を実施して得た反省点を踏まえて、再度実践できる機会を検討していくことや、学生も教員もアドバイスの視点からのコメントを増やすことなど、学習効果を高めていくために必要な指導の手立てについて示唆を得ることができた。

最後に、本研究における問題点について述べる。今回の調査では、読書行動の違いに関わらず、質問項目全体に渡って肯定的な回答をしている学生が大半であった。授業において、保育の専門性に関わる力が付いたという実感を学生が持っていることは良いことではあるが、一つの授業科目の中で、それを実現していくことが出来るのかと考えると疑問が残る。今回の調査結果について考えられることとして、学生が質問項目を捉え違えた可能性が挙げられる。学生は、筆者が担当している授業科目「保育内容（言葉）の指導法」に限らず、様々な科目において、保育の専門性を深める学びをしている。そのため、学生が質問項目の内容を「保育内容（言葉）の指導法」において実施した「『絵本の読み聞かせ』の模擬保育」から得た学びという範囲を越えて、拡大解釈して回答している可能性が考えられる。質問項目について認識を統一して回答してもらった場合に、回答結果が変わる可能性があるため、今後の研究課題としたい。

今後、「絵本の読み聞かせ」の模擬保育における振り返りや保育を改善する視点の学びを支える読書について、読書行動を高めることにつながる活動を、授業科目の中でどのように取り組んでいくか

を考えていくとともに、今回、統計的に有意な差が認められた「4 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けることができた」の項目以外の項目についても、学生の学びを支えすると考えられる事物への意識や経験が学修にどのように影響しているか明らかにしていきたい。

引用参考文献

- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）「教職課程コアカリキュラム」．https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf
- 佐藤由紀，近森節子，酒井克彦（2007）「大学生の読書実態と生協組織を通じた学生主体の読書推進運動の構築」『大学行政研究』，2，pp.61-73
- 汐見稔幸，無藤隆（2021）『保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント』ミネルヴァ書房．
- 村田文生（2010）「読書の有用性についての一考察」『埼玉純真短期大学研究論文集』，3，pp.67-73
- 保育教諭養成課程研究会（2017）「平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－」．https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1385790.htm